

# 図書館だより 第10号

2022.3.11 狛江高校図書館

新しい本が入ります！ ※別紙一覧表をご覧ください。

図書館 ～閲覧室のいま～



今年度最終号の「図書館だより」です。3年生は、卒業式を迎え新たな旅立ちです。みなさん、新天地での活躍を願っております。お元気で！！

3月分の新着図書を展示しますので、1・2年生は、春休みに是非読んでください。3月22日(火)から冊数無制限貸出が始まります。

3月～4月のカレンダー (変更される場合があります)

グレーは休館

日	月	火	水	木	金	土
3/13 卒業式	14	15	16	17	18	19
20	21 (春分の日)	22 無制限貸出(始)	23	24 新入生説明会	25 修了式	26 春季休業日(始)
27	28	29	30	31	4/1	2
3	4	5 春季休業日(終)	6 始業式	7 入学式	8 対面式 返却期限日	9
10	11	12	13	14	15	16 土曜授業 午後閉館

## 《第166回 直木賞の受賞作》 ※3月下旬入荷予定

直木賞



『塞王の楯』  
今村 翔吾 (集英社)

石工の匡介は、「絶対に破られない石垣」を造れば、世の中から戦を無くせると考え、一方鉄砲職人の彦九郎は「どんな城も落とす砲」で人を殺し、その恐怖を天下に知らしめれば、戦をする者はいなくなると考えていた。秀吉が死に、戦乱の気配が近づく中、大津城主・京極高次は、匡介に石垣造りを頼む。攻め手の石田三成は、彦九郎に鉄砲作りを依頼。大津城を舞台に、二人の職人の対決が始まり、ぶつかり合う。矛盾した想い、答えは戦火の果てにどうなるのか。「最強の楯」と「至高の矛」の対決を描く戦国小説。

直木賞



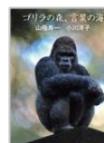
『黒牢城』  
米澤 穂信 (KADOKAWA)

本能寺の変より四年前、天正六年、織田信長に叛旗を翻して有岡城に立て籠った荒木村重は、城内で起きる事件に翻弄される。動揺する人心を落ち着かせるため、村重は、土牢の囚人にして織田方の軍師・黒田官兵衛に謎を解くよう求めた。事件の裏には何が潜むのか。戦と推理の果てに村重は、官兵衛は何を企むのか、『満願』『王とサーカス』の著者が挑む戦国ミステリの新作。



『100万回死んだねこ』  
福井県立図書館 (講談社)

本の正確なタイトルは、覚えづらく、うっかり間違っ覚えてしまうこともある。そんな図書館利用者の「覚え違いタイトル」の事例を集め、HPで公開しているのが、福井県立図書館の「覚え違いタイトル集」。その中からいくつかを選び、イラスト付きで紹介し、「正しい書誌情報」と「司書によるレファレンス」も掲載。クイズ感覚で読める一冊。



『ゴリラの森、言葉の海』  
山極 寿一、小川 洋子 (新潮社)

「野生のゴリラを知ることは、ヒトが何かを知る」と霊長類学者と小説家が語り合う。京都大学の研究室や屋久島の原生林を背景に、現代に生きる人の本性について二人の対話は続き、知のジャングルの中で、ゴリラを通して人間の姿を浮かび上がらせるといふ作品。



『中国料理の世界史』  
岩間 一弘 (慶應義塾大学出版会)

世界無形文化遺産への登録を目指す中国料理。北京ダックは、中華人民共和国成立後に中国を代表する料理となったこと、中国の料理をルーツとするラーメン、チャジャン麺、フォー、パッタイ、海南チキンライス、チャプスイが、20世紀に日本・韓国・ベトナム・タイ・シンガポール・アメリカの国民食になったことなど、俗説ではなく史実に基づき、アジア料理の成り立ちについて解説。



『硝子戸のうちそと』  
半藤 末利子 (講談社)

年をとると同じものが別のように見え、かぎりなく愛しくなってくる。家族の歴史、ご近所との関り、仲間たち、そして夫との別れ。漱石の孫である著者によるエッセイ集。夫は、昨年亡くなられた昭和史研究家の半藤一利氏。



『最強脳』  
アンデッシュ・ハンセン【著】  
久山 葉子【訳】 (新潮社)

2021年上半期の新書ベストセラー『スマホ脳』の著者による新作。コロナ禍で自宅にすることが多くなり、スマホやパソコン、ゲームやSNSに費やす時間が増え、運動不足や睡眠不足、うつになる児童や若者の増加が問題になっている。記憶力や集中力の低下、成績悪化、心の病まで引き起こす、そんな毎日を一変させる方法について解説。



『東京オリンピック始末記』  
小笠原 博毅、山本 敦久 (岩波書店)

東京オリンピックが終了した今、オリンピックのあり方や問題点、IOCが主導するスポーツ、そしてアスリートの姿について、研究者でもある著者が、東京2020を「終わったこと」にさせないため、改めて総括した作品。

## 学習支援図書の中から



『高校の古文読解が1冊でしっかりわかる本』  
岡本 梨奈 (かんき出版)

歴史的仮名遣いのポイントをわかりやすく解説し、古文をはじめ勉強する人や古文が苦手な人でも、古文が読めるように工夫されている「古文読解」の入門書。



『数理の窓から世界を読みとく』  
初田 哲男、柴藤 亮介 (岩波書店)

数学をベースに様々な現象を理論的に解明する方法、数理。素数、人工知能、生物の進化、宇宙に存在する暗黒物質—数理を通して4つの異なる分野の若手研究者が、自らの進路選択の話や研究の魅力を交えながら、「数理」という研究テーマを紹介している。

## 《リクエストされた図書の中から》



『英語で心いやされるちょっといい話』  
ちょっといい話製作委員会【編】(アルク)

英語で書かれた、心がいやされる作品。初級3000語レベルの英単語がベースとなり、ストーリーを英語のまま理解でき、多読学習の入門書として、ゆったりとしたリズムで聞きとりやすいナレーションが特徴。リスニング力アップにも繋がる一冊。



『活きる』  
余 華【著】  
飯塚 容【訳】 (中公文庫)

激動の中国を生き続けた、ある家族の物語。生と死、愛と別れ、幸福と苦痛、時間の神秘、四十数年の時を経た今、老人が朗々と民謡を歌い、自らの過去を語る。中国および諸外国で今なお読み継がれ、四十カ国で翻訳出版された中国文学史に残る作品。



『名画で読み解くロマンフ家12の物語』  
中野 京子 (光文社)

『名画で読み解く』シリーズ第三作。ロシアの近代史において、広大な領土を治めたロマンフ家の繁栄から滅亡まで、約300年の歴史をカラーの名画とともに物語風に語りかけている作品。ロシアの歴史やロマンフ王朝の歴史を絵画とともに学べます。